

DO FIELD

Doshisha
University

同志社大学スポーツ健康科学部教員父母連絡会報 [ドゥ・フィールド]



2024.11 **22**

特徴
スポーツ消費者行動を分析し
スポーツ組織の
マーケティングに役立てる研究
スポーツに参加する、あるいはス
ポーツを観戦する「スポーツ消費者」を研



スポーツ・
マーケティングゼミ
二宮 浩彰 教授

RESEARCH
SPO-KEN SEMINAR

リサーチ!
スポ健ゼミ

生きる力を 総合的に培う

本学部で扱うスポーツ健康科学とは、多角的かつ柔軟な視点でスポーツと健康を科学する、文理融合型の応用総合科学です。今回はそれらの中からスポーツ・マーケティングおよび運動制御のゼミを紹介し、多様な視点をはじめとする学問的態度を学びながら、社会へ巣立つための総合力を育てていく学生たちの姿をお伝えします。

内容
テキスト講読と
フィールドワーク
研究力と「生きる力」を培う
3年生が最初に取り組むのはチームビルディングです。アドベンチャー体験施設「ボウケンノモリ」に出かけ、チームで課題を乗り越える野外実践プロ

究対象とする分野がスポーツ・マーケティングです。スポーツ消費者のデータを収集・分析し、その行動を実証的に解明することで、研究成果を経営上の問題解決や意思決定に役立ててもらうため、スポーツ組織にフィールドバックするのが目的です。二宮先生自身は「京都マラソン」などの都市型市民マラソンの参加者や、プロバスケットボール観戦者のスポーツ消費者行動を分析する研究を行っており、自らもアウトドアスポーツ全般を趣味として実践しています。

ゼミ生はスポーツを手段とした地域の活性化、スポーツ産業の発展を目指す。最近の卒業研究では、アスリートによる商品のプロモーションが消費者の購買行動に与える効果をテーマに取り上げたゼミ生がいました。実在するアスリートの容姿、行動規範、人格などをさまざまな観点から多面的に評価し、消費者の購買行動との関係を分析する研究でした。

3年生の授業では、冒頭にスポーツ・マーケティングに関する最新の新聞記事を1人1件持ち寄って発表。二宮先生がコメントすると共に、文献やデータの探し方などのアドバイスをを行う時間となっています。その後、幅広くスポーツ・マネジメントを扱ったテキスト「スポーツ産業論」を全員で分担して講読。1人ずつ発表を行った後、全員で質疑応答、ディスカッションを行います。1章を1人で担当するためボリュームや発表時間も多く、学生にとっては卒業研究のための基礎力を身につける良い機会となっています。本ゼミのテーマは「生きる力」。二宮先生は「社会に出れば、人はさまざまな状況に置かれます。そのとき、自分で適応

グラムに参加。例えば体格も身体能力も異なるゼミ生たちが高い壁を乗り越えるには何をすればいいのかを全員で考え、行動することにより、ゼミの結束が固まります。



アドベンチャー体験施設「ボウケンノモリ」

二宮先生がゼミで一番重視するのは「研究をする」という姿勢。積極的に研究を行った結果を日本生涯スポーツ学

し、自分の応用力で課題解決をする人になるための経験をゼミでしてもらえれば」と期待しています。

本ゼミでは教室外での活動も多く行っています。フィールドワークでは事前に十分な計画を立て、ゼミ生自身が先方との日程を調整し、現地へ行って関係者にヒアリングを行い、結果を持ち帰って研究成果をまとめます。現場の声を聞くことでスポーツ・マネジメントの実情を肌で知ることにより、社会との接点を自ら築くことにより、先ほどの「生きる力」を培う貴重な機会となっています。例えばVリーグのパナソニックパンサーズに関する観戦者調査では、最初の交渉は二宮先生が行い、後の調整、調査、分析、先方へのフィールドバックはすべてゼミ生が行いました。こうして一通りのマーケティング・リサーチを経験したゼミ生の中には、入社先で希望してマーケティング部署に配属されたケースもあり、二宮先生も手ごたえを感じています。将来的にスポーツ関連業種への転職を見据え、マーケティングに力を入れる企業に就職した卒業生もいます。他大学やスポーツ健康科学部の他のゼミとの合同合宿、合同フィールドワークも行っています。教員も学生も刺激し合うことにより、互いにゼミ活動の活性化を目指すのが目的です。



ご挨拶 教員父母連絡会会長 平石祥吉

日頃は同志社大学教員父母連絡会にご支援とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。本年度教員父母連絡会の会長を務めさせていただきます平石と申します。どうぞよろしくお願い致します。本年はパリオリンピック・パラリンピックが開催され、同志社大学出身のアスリートが世界の頂点に向けて競技をしていました。たくさんの勇気や感動をもらいながら一方でスポーツの持つ素晴らしさを改めて感じた一年となったのではないかと思います。5月の総会はオンラインでの開催でしたが90組を超える多くの皆様に参加いただき誠にありがとうございました。対面での開催が叶わず非常に残念であります、

遠方の方々にも気軽に参加できる形はコロナ禍の副産物とはいえ、今後も継続しても良いのではないかと考えております。教員父母連絡会の活動は、皆様のご理解とご協力があつてこそ成り立っています。今後とも、積極的にご参加いただき、共に学生の成長を見守り、世界へ大きく羽ばたく支援をして参りたいと思っております。皆様のご意見やご要望をお聞かせいただきながら、より良い活動を展開してまいりたいと思っております。最後になりますが、同志社大学スポーツ健康科学部の益々の発展と学生、父母、教員の皆様のご健勝を祈念致しまして一言挨拶とさせていただきます。

C O N T E N T S

ご挨拶 平石祥吉会長

01 特集 リサーチ! スポ健ゼミ 生きる力を総合的に培う

二宮ゼミ・上林ゼミ

06 ATHLETE スポ健アスリート列伝

034 林慶音さん/035 舛川菜さん

08 FOCUS スポ健きらり

016 東本侑也さん

09 ACADEMIC 成績通知書の確認方法

10 TOPICS

2024教員父母連絡会 総会レポート

最新の研究機器紹介/ドイツからの留学生紹介 Neag Ericさん

新しく着任された先生から自己紹介 廣光先生・川間先生・大石先生

スポーツ健康科学部生の活躍

17 ANNOUNCEMENT

父母会役員構成について/寄贈図書/キャンパスカレンダー

「DO-FIELD[ドゥ・フィールド]—同志社大学スポーツ健康科学部教員父母連絡会報—

「DO」は、行う、行動を起こすこと、能動的、積極的な姿勢を示し、DOSHISHAの「DO」も意識しています。そして「FIELD」は文字通り、フィールド、場の意、スポーツのイメージも喚起させます。DOSHISHAおよびスポーツ健康科学部というフィールドで、何ができるか、教員、父母、もちろん学生も一緒になって考えるための相互のコミュニケーションの場でありたいという願いを込めました。(ネーミング/辻田和樹・父母会員OB)



会で発表するチャンスもあります。3年生にはややハードルが高いため実際に発表できるのは毎年1、2名ですが、日本スポーツ産業学会主催のアイデアコンペには3年生の半数以上が挑戦しています。過去には沖縄観光のビジネスコンテストに挑戦したこともありました。これらの活動を通じてゼミ生は研究力と実践力を高め、それは「就職活動への自信にもなる」という二宮先



ゼミ生インタビュー
高島 咲良さん(3年)
広島カープファンとして
スポーツによる
地方の活性化を研究

プロ野球の広島東洋カープのファン

で、大学では準硬式野球部のマネジャーをしています。高校の3年間、探究活動でカープによる経済効果を研究しました。その際、カープのイメージキャラクターとのコラボ商品などが消費者の購買意欲を非常に高めることを知り、スポーツ・マーケティングに興味を持ってこの学部に入りました。

現在の個人的なテーマもスポーツによる地方の活性化です。カープは25年間優勝できなかった後、2016年からセ・リーグで3連覇しました。それまで球団の経営状態は良くなかったのですが、優勝を機に、球場周辺のコンビニの外観を赤に染める、路面電車の車内ア

生の力強い言葉がありました。

して愛犬のゴールデンレトリバーを連れてこられて楽しく接してくださり、意外な一面を知ることができました。私たちの進路相談にも親身に乗りっくださる先生です。

永田 聖弥さん(3年)
蓄積した知識から
多角的な視点を育て
「生きる力」を養いたい

高校の体育祭で、学校全体がスポーツで盛り上がっていることを実感。このようなスポーツイベントを地域に拡大させることで地域復興につなげられるのではと考えていたのが、スポーツ健康科学部と二宮ゼミの志望理由です。



永田 聖弥さん

二宮ゼミでの学びはとても楽しいです。チームビルディングの効果もありましたし、やる気のある人が集まって高め合う雰囲気が好きです。ゼミでの学びの楽しさは、多様な知識が得られる点にあると思います。スポーツブランドに関心のある人はメーカーの販売戦略を調べたり、同社スポーツア

ナウンスを選手の声で流すなどのコラボに取り組むことで、地元の人たちと一緒にカープを応援する風土が醸成されています。



高島 咲良さん

同じ広島では今年、Jリーグのサンフレッチェ広島が新しいスタジアムを建設しました。従来は山の方にあったものを市街中心部に移し、周辺をボールパークのような公園として整備しています。試合のない日でも市民が集えて、子どもも遊べる空間です。これによって、サンフレッチェの試合の観客動員数やファン数がどう変化するのかわを調査・研究して、卒論にまとめたいと考えています。

ゼミとは、大学に入って初めてできる固定クラスです。2年間変わらないメンバー同士で協力していく必要があります。仲良しではありますが、意見の違いから衝突が起る可能性だってあるかもしれません。そのようなときでも多様な価値観を理解し合いながら、自分の志を大切にしていければと思います。卒業後は、やはりスポーツに関する

いますが、その中でも地域に根ざしたインフラ関連に興味があります。そこにスポーツも関連づけて働くことができればいいなと思いつつ、今は常に新しい知識を取り入れつつ、幅広い選択肢から考えるようにしています。

運動制御ゼミ

上林 清孝 准教授



特徴
ヒトの運動制御メカニズムを
神経生理学的アプローチで研究

ヒトの身体運動は骨格筋の収縮によって行われており、その収縮は、脳や脊髄と呼ばれる中枢神経系からの指令によって制御されています。細かい調節が必要な運動でも、練習を繰り返すことによってヒトは学習し、スムーズな動作ができるようになります。しかしこのような神経基盤は、まだ十分に解明されていません。本ゼミではこの

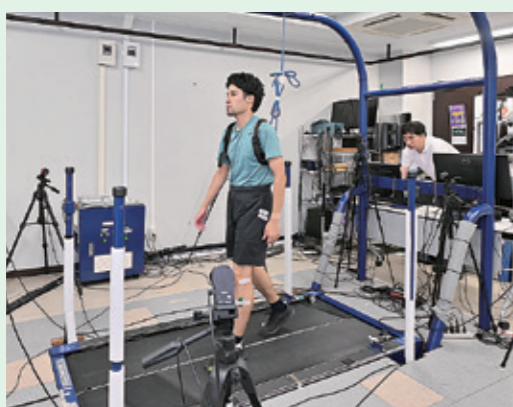
仕事をしたいです。最初は「好き」を仕事にするのが一番いいと思い、一時期は球団職員を目指していましたが、でも狭き門と聞きますし、それを仕事にする夕方6時から野球観戦はできません。今はスポーツメーカー、社会人チームを持つ企業、スポーツのスパンサー企業などに選択肢を広げています。また、今はスポーツによる街づくりをゼミで学んでいますので、街づくりの焦点を当て、大学で学んだ事をインフラや通信業界などで生かせるのではとも考えています。どんな道へ進んだとしても、いろいろな人との出会いを大事にしていきたいと思っています。



二宮先生は今まで固いイメージがあったのですが、「ボウケンノモリ」に行ったらときにはアニマルセラピーと

ようなヒトの運動制御・学習のメカニズムに着目。歩行のような日常生活の身体動作からアスリートの運動パフォーマンスまでを対象に、さまざまな実験機器を用いて、脳・脊髄の興奮性や筋活動などを評価する手法から研究しています。

上林先生の最近の研究から、一例を紹介いたします。ランニングマシンとして知られるトレッドミルを用い、ベルトを左右異なる速度で動かしながら歩き続けることによって生じる、歩容や筋収縮の変化の研究です。左右のベルトの速度が違えば最初は左右非対称な歩行になりますが、徐々に神経系が環境に適応し、左右対称に近い歩行に変わってきます。これについて筋肉の活動



トレッドミル/ベルトが左右で分かれて速度を変えられるスプリットベルト型。ベルトの下にはフォースプレート(床反力計)という装置が内蔵されており、床を蹴る力の強さを計測できます。

や下肢関節の動き、歩幅などを計測し、ヒトの適応メカニズムを研究するものです。このような研究は、例えば脳卒中によって身体の左右どちらかに麻痺症状のある人などに対し、より効率的なりハビリを計画する際のアプローチに活用できますし、アスリートの優れた身体能力を生み出す神経制御機構の解明に近づく研究とも言えそうです。

上林ゼミには体育会運動部で選手やトレーナーをしている学生が多く、現在の3年生には硬式野球、ラケビー、バスケットボール、ソフトボールなどの選手がいます。上林先生自身もバスケットボール経験者です。球技系スポーツでは、対象であるボールの動きを正確に知覚・認知しないといけないため、競技者は目から取り入れたボールの情報、自身の身体の位置、身体内部



経頭蓋磁気刺激装置／コイルを頭部に当てて脳の特定位に磁気刺激を与え、脳の活動の変化を計測します。

の情報などを脳内で処理し、視覚と感覚の情報を統合させる必要があります。チームスポーツであれば、相手や味方の位置などさまざまな視覚情報も処理します。それらの情報が、脳のどんな領域でどのぐらいのタイミングで処理されているのかなど、現役アスリートに興味深い話題も扱われています。「ヒトの身体の仕組みは非常に興味深いです。筋トレをしても運動制御が上手く行われなければパフォーマンス向上にはつながらないし、加齢で筋肉が萎縮すれば、脳からの指令もかつてとは変化してしまう。状況に応じて身体を効率よく動かすための脳や神経の働きを学び、学生自身のパフォーマンス向上にもつなげてもらえればと思います」(上林准教授)

内容

多様な実験で試行錯誤しながら問題解決能力や探究心を育ててほしい

3年生の春学期では、運動制御・学習についての基礎的な理論を学び、多様な計測機器の特性を理解しながら、取り扱いを学んでいきます。こうして秋学期の中頃までは、3、4人ずつのグループに分かれて機器を自分たちで操作し、計測したデータを集めて処理、解析。結果をまとめて図表化し、全員でディスカッションするという一連の学びを繰り返していきます。その中で卒業論文作成に向けて、自身の研究の

方向性も形づくっていきます。

実験が中心となる授業では、諦めない態度、細かい点に気づく観察力などを継続することが必要です。そして本ゼミで一番重点を置いているのが、問題解決能力を身につけるための学び。例えば実験では、思うようなデータが取れないこともあるでしょう。そういうときでも諦めずに予備実験を繰り返す、問題点を洗い出そうという指導が行われています。また実験結果の解釈には、説得力のある論理的な説明が重要です。そのため論理的な思考能力、考えた内容を自分の言葉に表せる発表能力も合わせて培うのがゼミという場なのです。「3年生の間はグループワークで学んでも、卒業研究は個人が疑問に思った事象に対して、実験をデザインしていきます。3年生はそのための基盤を整える期間と言えるでしょう」(上林准教授)



グループワークでは協力し合って実験を行いながら協調性を培い、ディスカッションを通じて自分にはない考え方や視点を見つけていきます。そのた

め毎回グループを変え、新しいメンバー間で積極性を促しながら、各自が次々に新しい気づきを得られる仕組みが用意されています。そしてゼミの2年間を通じて学問的な探究心を育て、実社会でも積極的に学び続けられる人材になってほしいというのが上林先生の願いです。学生の就職活動については、授業時間外でも個別相談が可能です

4年生対談

池上 侑京さん(4年)
眞壁 一佐さん(4年)

自身の競技に活かせる学びが可能 鵜呑みにせず疑う態度も大切に

——上林ゼミの志望理由を教えてください。

池上 2年生で受けた基礎実習や上林先生の「身体運動制御論」の授業で、運動学習や神経系の世界に興味を持ちました。硬式野球をしているので、その方面も研究できると聞いて決めました。

眞壁 僕は硬式野球部で学生コーチをしています。自分の身体を上手く使える選手とそうでない選手の違いは何なのかというところに興味があり、身体活動と神経系との関わりという上林先生の研究分野で自分の興味が深められるのではと考え、志望しました。

——上林ゼミで学ぶ楽しさは何ですか。眞壁 実験によって、自分の知らないことが分かるようになる点です。例えば足の裏の重心がどこにあるかを実験したとき、自分が実際にどこに重心を置いているかが数値となって分かったのは面白かったですね。野球に4スタ



眞壁 一佐さん

ンス理論というのがあって、4等分した足裏のどの部分で重心を取っているかによって打撃フォームが異なるので、勉強になりました。

池上 ジャンプの反応時間や握力などを計測した際、被験者がしている競技によってばらつきがあったり、競技特性が出たりしたのが面白かったです。

——上林先生はどんな先生でしょうか。池上 学生のする事をよく見てくださっていますし、話しやすい先生だなと感じています。研究テーマを決めるときなど、一人ひとりに対して細かい指導をしてくださっています。

眞壁 メンバーの部活の動向を気にかけてくださっているのか、「野球部勝ったね」など、気さくに話しかけてくださることもあって嬉しいです。だからゼミはいつも、和気あいあいという雰囲気です。

——卒業研究のテーマを教えてください。眞壁 僕は筋トレが好きなので、ベンチプレスの傾斜角度を変えたときに、大胸筋・三角筋・上腕三頭筋の動きが

どう変わるのかを、筋電図を用いて研究しています。

池上 僕は野球のスイング動作について、素振りとイメージ能力に関する研究をしようと考えています。ティースタンドのない状態で球のコスや高さをイメージして素振りをするとき、実際にイメージ通りのコースにミートできているかを、映像分析やアンケート調査などによって調べます。

——卒業後の進路はどのようにお考えですか。眞壁 ワーキングホリデーを利用して、オーストラリアに行こうと考えています。父に人生で後悔している事を尋ねたとき、「英語が得意でないこと」という返答がありました。父からも海外に行ってみたらと言われて、2、3年海外で英語を勉強してみようかなと考えようになりました。



池上 侑京さん

池上 僕は一般企業への就職を考えています。具体的にはハウスメーカーです。暮らしたい部分で何か人のためになる仕事をしたかったので、人生で大きな買い物に寄り添う仕事がいい

なと考えました。人とのつながりを築くのも好きなので営業職志望です。

——ゼミを通じて、一人の学生としてどのように成長できたとお考えですか。眞壁 論文研究などを通じて、物事に対してまず疑うことから入る思考や意識が身についたように思います。そういう姿勢は社会に出ても忘れないようにしたいです。

池上 上林先生が最初に論文の選び方を教えてくださった際、普通は成果の出ている論文に飛びつきがちだけど、たとえ成果が出ていなくても良い論文もあるというお話が心に残っています。またプレゼンへの質問に答える訓練を何度もしてきたので、疑問点の持ち方、答え方など、社会に出る準備の一端ができたかなと思います。3年次では、いわば与えられた実験で学んできましたが、残る1年間では自分の卒論のための実験をしていきます。そこでさらに総合力をつけたいです。

——これからゼミを選ぶ学生さんにアドバイスをお願いします。池上 友だちと同じゼミを選びたがる人もいますが、ゼミに入れば、また新しい友だちができます。それよりも、2年次で学んだ中で明らかに自分の興味が大切にしてほしいです。

眞壁 自分の関心を一番の軸にして、ゼミ選びをしてほしいです。その参考になる良い機会が基礎実習なので、先生方の研究内容をよく学んでいただければと思います。

U20代表にも選ばれたNo.8

**突破力を評価され
大学1年からレギュラー入り**

小 学校6年間はサッカーに没頭し、父からは、自ら考え、のびのびとプレーする姿勢を学んだ。ただ地元中学校のサッカー部は楽しさ優先。もっと打ち込める部活を探し、体格の良さを見込まれて誘われたラグビー部の体験会で、楕円形のボールを追う面白さに目覚めた。「タグを取ったりキックをしたりというゲームが楽しかったので入部しました。あれは体験詐欺ですね(笑)」

入ったラグビー部は強豪チーム。大阪府で3位になり、高校も強豪校へ。



【はやし、けいと】スポーツ健康科学部3年次生。大阪桐蔭高等学校出身。中学校でラグビーを始め、高3で全国高等学校ラグビーフットボール大会に出場。大学入学後は2022年全国大学ラグビー選手権ベスト8に貢献。23年にはU20日本代表に選ばれ、ワールドラグビーパシフィック・チャレンジ2023(サモア)、ワールドラグビーU20チャンピオンシップ(南アフリカ)に出場。180センチ、104キログラム。

高3で花園出場を果たし、高校日本代表候補に選ばれてU19エキシビジョンマッチも経験した。関東の大学からも誘われたが、関西のラグーマンとして関東の強いチームを倒す方が、達成感が大いと思った。憧れだった「全員で守り、全員で素早い攻撃をする同志社ラグビー」を選び、今日に至る。

大学では1年生からレギュラーを張る。ポジションはナンバーエイト。大型選手が組むスクラムの最後尾でフォワード陣に的確な指示を飛ばす一方で、好機と見れば攻撃にも参加する。攻守両方に活躍できる面白さを感じながらも、体重を増やして走力も高めなければという難しい課題に直面した。大学入学後は瞬発力を鍛えるウエイトトレーニングに取り組んだり、夕食に白米900グラムを食べたり。今年走り込みにも力を入れ、同志社のナンバーエイトにふさわしい身体づくりに励んでいる。入学時、監督からは「ボールキャリーと人間性に期待する」という言葉ももらった。ひとたびボールを受け

**トレーニングとゼミ研究を通じて
世界標準にアプローチ**

ラ グビーの魅力を感じ、小柄でもスピードのある人が活躍したりと、それぞれの身体や得意な能力が生かせる場所です。そんな15人が意識統一すれば絶対に強い。そこへ至るまでが難しいとも言えます」

その意思統一にはころびがあったのか、2023年は初めて関西大学リーグ最下位に沈んだ。今年、ラグビー部は「ORIGIN」をスローガンに掲げている。「スクラムやモールという原点に立ち返り、基礎練習を大切にしています。シーズンに入れば難しい試合や時期もあるでしょう。そのときはまず原点に戻る。それを選手間で確認し合っています」

林さん自身は昨年U20日本代表に選出され、海外遠征を経験した。サモアで行われたパシフィックチャレンジでは1勝を上げ、将来への道筋が見えた。その後、南アフリカで開催されたチャンピオンシップではフランスに12対75、ニュージーランドに19対62と大敗した。日本代表は全員大学生。一方で相手国の選手たちは同年齢でも、大会でアピールできればすぐプロに入れるような

実力者揃い。両者の隔たりを肌で感じた。「体格や身体能力の違いが一番大きかった。フランス人のように骨格的にそれほど大きくない選手でも、筋肉の塊です。彼らは大学の部活ではなく、ずっと毎日ラグビーに打ち込める環境でトレーニングをしている。その差は大きいです」

課題は多く見つかったが、U20代表としての経験は財産になった。プレイヤーの異なる大学の選手たちが人間関係の構築から始め、合宿で毎日ミートングを行い、皆で意見を統一して「一つのラグビー」をする。初めての土地にも適応しながら、仲間と共に考えて動くことを学び、人としてもラグーマンとしても大きな手ごたえを感じたという。

大学では新井ゼミに所属。卒論は日本と外国のラグビー選手の体格や身体能力の違いなどを研究し、自身のプレーにフィードバックするつもりだ。

今シーズンの目標は、まず関西リーグ1位。そこから日本一を目指す。そのためにも、自身の強みであるボールキャリーに磨きをかけたいと意気込む。卒業後は実業団でプレーを続け、ワールドカップ出場という大望も秘めている。「昨年は同志社ラグビーを応援してくださる方々にご心配をおかけしました。今年は選手たちの身体も大きくなっていきます。原点を忘れず、僕たちのスタイルを崩さずに頑張ります！」

世界に羽ばたくトワラー

**団体世界1位を経験して
ソロで全日本の表彰台を狙う**

ハ レードなどの花形としておなじみ。バトントワリング。現在は高度なバトンテクニクやアクロバティックな動きに代表される競技性と、音楽に合わせた身体表現という芸術性が融合したスポーツとして発展を遂げている。

艸川さんのバトン歴は3歳のときに始まる。6歳上の姉が通っていたバトン教室に同行し、楽しそうにバトンを回したり踊ったりする姿に憧れて自身も通うようになった。小学校6年生になるとさらに向上心が高まり、京都・滋賀を拠点とする有名バトンチームに



【あさかわ、しおり】スポーツ健康科学部2年次生。京都府立鳥羽高等学校出身。3歳の頃バトントワリングを始め、中学3年から世界大会にも出場。近年の主な成績は、(2022年)第50回バトントワリング全国大会OPEN団体1位、第17回全日本バトントワリング選手権大会女子ニアインソルトワール、同ソロストラット共に6位、第35回世界バトントワリング選手権大会フリースタイル・ペアジュニア1位、(2023年)第48回全日本選手権女子ニアインソルトストラット6位、(2024年)第49回全日本選手権女子ニアインソルトワール4位、IBTF世界選手権フリースタイルチーム2位。

所属。放課後は京都や草津の体育館に通い、夜遅くまで大学生や社会人と一緒に技を磨いた。勉強は移動時間にこなし日々。先輩たちの活躍を間近に見ながら、自然と世界の舞台を目指すようになった。

ると全日本ジュニアで表彰台の常連になり、高3ではフリースタイル・ペアジュニアで世界の頂点に立った。大学入学後も世界で団体1位、個人ではシニアで全国6位。計6種目に出場しながら、着実に成長を続けている。観衆が吸い込まれるような演技ができたとき、バトントワリングの楽しさ、面白さを感じるという。曲やリズムとの一体性、物語性、スピーディーな展開など種目ごとに個性があり、同じ技でも組み合わせ方やアレンジによって多様なパートトリが生まれるところに、このスポーツの奥深さを感じている。「海外の選手の面白そうな技を真似してみたり、チーム内で新しいアイデアをいだいたりしながら、自

**心身共に
ハードな練習を乗り越えて
「人の心を動かす演技」に
到達したい**

バ トントワリングの操作技術は大別すると3つ。空中にバトンを投げ上げるエーリアル、バトンを手で持つことなく身体の上を転がして移動させるロール、バトンを身体の近くで回転させるコンタクト・マテリアルだ。さらに細かい技術は数百種類あるといわれ、これらを組み合わせる複雑な演技を行う。ひたすら反復練習を繰り返して身体に覚えさせ、自宅に設置した大きな鏡の前でも動きの研究に余念がない。クラシックバレエの練習や筋トレにも取り組む。

競技で使われる音楽も深く理解する必要があり。中3で団体部門に出場した世界大会では、シルク・ドゥ・ソレイユが映画「アバター」の世界を舞台化した際の音楽が使われた。実際に映画を観賞して作品の世界観や登場人物の動きを研究し、アバターの仲間としての力強さ、動きのキレ、しなやかさを表現した。

大切にしているのは「緊張感を持った練習」。バトンの取り落としは減点対象になるし、チーム競技で誰かがバトンを落とせば、集団美は一瞬で損なわれる。大きな大会の前には本番の緊張状態を想定し、トスしたバトンを10

回連続で受けるような厳しい練習にも取り組む。1度でも落とせば最初からやり直し。プレッシャーとの戦いを支えるのは「バトントワリングを通じて人の心を動かせるようになりたい」という強い願いだ。

中学時代は腰椎分離症に苦しむなど、何度も痛い思いをしながらバトンを続けてきた。だからこそ競技者としての身体を使い方など、運動科学を学んで競技に活かしたいと考え、スポーツ健康科学部を選んだ。草津で練習があれば帰宅は23時頃とハードな日もあるが、授業は楽しい。休日は友人との時間も大切にしている。「いろいろなスポーツで頑張っている友だちと刺激し合えて、毎日が充実しています」

こうして学業とバトンを両立させ、世界大会での金メダル獲得などが評価されて、昨年度はKCAA(大学スポーツコンソーシアムKANSAI)大学スポーツ奨励賞も受賞した。ただし「バトンは大学でやり切る」と決めている。「本番前にコーチがよく言うのは『人に喜んでもらえる演技をしましょう』ということ。演技後に家族や皆が喜ぶ顔を見ると、バトンを続けて良かったと思います。だから将来は何であれ、人に喜んでいただけるような仕事に就きたいと考えています」

今年8月にスウェーデンで行われた世界大会でも団体2位に貢献した。残る2年間で、どのような高みへと舞い上がるのか。成長に期待したい。

林慶音さん(3年) Keito Hayashi ラグビー

艸川 さん(2年) Shiori Kusakawa バトントワリング